

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：34320

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520600

研究課題名(和文) 中国の大学での英語教員養成課程の現地縦断調査—日本への提言

研究課題名(英文) The Overall Research on English Teachers' Training in Shanghai--Advance to Japan

研究代表者

陸 君 (Lu, Jun)

京都文教大学・臨床心理学部・教授

研究者番号：40351374

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：この4年間、両研究者は前回科研費の調査方法を改善し、毎年9月に一週間ほど、上海師範大学・外国語学院の英語学部にて、英語師範専攻の学生を中心に、入学から卒業まで、現地の縦断調査(TOEFL模試、教室内でのエスノグラフィカル・スタディー、学生と教員にインタビュー、学部長らとの会談等)を4回行った。また、最後の2年間は、学生の小・中・高校での実習現場も見学し、教員らとの懇談も実施した。最も印象的なのは、見学した授業は全部英語で行い、教科書も系統的とした。調査結果は、二つの共著研究論文(立命館大学言語教育情報研究科に第1号と第2号)と一つの単著論文(京都文教大学人間学研究第14号)に掲載された。

研究成果の概要(英文)：During these four years, the research representative Lu, took charge of all the operations for on-the-spot investigation at Shanghai Normal University, together with co-researcher, Prof. Taura as a specialist on second language acquisition, improved the former Kakenhi method and worked out a better road-map for four-year-research to follow those English teachers' major students from their entering to and graduation from the University.

Each year in September, we stayed in Shanghai for one week to carry out a data-collecting survey, focusing on TOEFL mock test, classroom conditions, teachers' methodology and English proficiency, interviews to teachers and students, deep talking with deans and executives etc.,. The most impressive points are the Chinese teachers' excellent English proficiency and China's efficient goal-bound educational system. The data and information gained are summarized into three papers published in two academic journals of Ritsumeikan and Kyoto Bunkyo University.

研究分野：英語教育

科研費の分科・細目：基盤研究C・一般

キーワード：英語教員の養成 英語教育 教育実習 英語教員の実力 English onlyの授業

1. 研究開始当初の背景

大学教養英語教育の効果について日中比較を、科研費研究として平成 17-19 年度の 3 年間、上海地区 7 大学・日本国内 4 大学を対象に行った。この結果、(1) TOEFL 得点の高さと大学 4 年間での伸び率は中国が日本を大きく引き離している事実、(2) 中国の大学英語教員の英語力(特に発音を含めた発話力)の高さ、(3) 中国学生の高い英語力向上への動機付けと授業内外での絶え間無い努力、の 3 点が明らかになった。そこで本研究では、上海師範大学の英語専攻の学生の入学から卒業までを縦断的に追跡し、英語圏への留学経験が無くとも高い英語運用能力を持つ教員をどのように養成しているのか詳細に調査し、日本の英語教員養成に提言としてまとめたいと考えた。

本研究代表者である陸は、中国で生まれ育ち、中国で英語教育を大学まで受け(専門は英文学)6 年間中国の大学で英語教員として教鞭をとった後、日本の大学で教養英語教育に 10 数年従事してきた。日中両国の大学レベルの英語教育に精通する希少な体験を持つ教育者・研究者である陸が、日本における高い英語熱にもかかわらずあまり向上しない日本人の英語力に疑問を持ったのが、本研究の原点である。幸い未だに上海地区の数大学の師範大学及び総合大学の外国語学部学部長や英語科主任教員と懇意であり、通常部外者が入ることが難しい所の見学や、教員・学生の忌憚りの無い話が聞ける場の設定等が可能であった(平成 17 年度からの科研費研究時に既に実証済み)。一方、研究分担者の田浦は日本で生まれ育ったが、豪州で修士・博士教育(応用言語学専攻)を受け、日本の中高校で 17 年勤務後、現在は大阪府立大学で応用言語学(心理言語学)と英語教授法に関する講義を担当している。中学から大学教育までの連続体としての日本の英語教育現場の問題点をつぶさに目の当たりにしてき

た経験と、自らが大学時代に教員養成課程を修了した経験を本研究に生かしながら、心理言語学・第 2 言語習得論の専門家として、本研究のサーチデザイン・データ収集法・統計処理を専ら担当するよう計画した。このように、2 研究者が相互補完的な仕事をする事で、平成 17 年度からの 3 カ年で挙げることの出来た成果を更に前進させ、表面的な報告しかできない日本人研究者による現地視察とは比較にならない、深みのある優秀な英語教員を生み出す中国のシステムの現状を浮き彫りにさせることができると確信をもって取り組んだ。

平成 20 年 9 月、既に上海師範大学の外国語学部部長の蔡龍権教授より、TOEFL pre/post-tests の実施、スピーキングテスト、ライティングテスト、アンケート調査等の実施の内諾を得ていたので、毎年 9 月の 1 週間は現地調査を行うよう手はずは整えた。4 年間の研究中、1 学年の学生の入学から卒業までを追うことで、具体的な教員養成の姿を調査し、まとめ、日本での教員養成への提言としてまとめあげるのはさして困難ではなかった。これは、平成 17 年度からの 3 カ年の科研費研究で既に我々が上海師範大学と有効な関係を築き、先生方とも既知の間柄であったからである。この師範大学で英語師範専攻が主として将来中高現場での英語教員を目指す学生の教育に当たっている一方で、将来大学レベルでの英語教職に就くことを目指している英語専攻の学生の追跡調査も計画し、こちらも新入生入学年の 9 月から、学年末 5 月に 4 年継続して同時にデータ収集するよう計画した。

2. 研究の目的

中国での英語教育を現地調査しながら TOEFL 得点の国際比較は、先行研究の精査で見いだすことが出来たが、現地の言語・習慣を熟知した研究代表者が、既知の友人が副学

長や主任教授を務める上海師範大学で、4年間（年度当初1週間、学年末1週間）現地調査することで、中国の英語教員養成の実態が確実に浮かび上がり、前例のない研究になるのは間違いないと思われた。更に、調査研究に留まることなく、2研究者が現在担当している日本での大学教養英語や教員養成の改善に関する提言としてまとめることも、職歴から見るとごく自然に出来、それを国内諸学会で発表することで、現場におおいに還元できるはずだと考えた。

平成17年度からの調査で一番驚いたのは、英語圏出身の教員は約2%しか占めていないにも関わらず、中国人の英語教員が授業の全てをアクセントフリーな見事な英語で進めている点であった。どの授業を見ても甲乙つけがたい高い英語能力を持つ先生ばかりで、インタビュー時、「教員養成課程や外国語大学では、下級生の時に非常に厳しい発音トレーニングを受けるので、中国の英語教員は皆一定レベルの発話力を身につけて卒業していく」という話を伺ったが、本研究では、教員からの話だけではなく、実際にどのようなカリキュラムでどのような授業を学生が受けていて、どのレベルに到達すると単位が認定されるのかをつぶさに見学し、多くの教員・学生から生の声も収集することも計画に入れた。

経済面では注目を集めている中国であるが、その優れた英語教育についてはこれまで先行研究が少なく、実態については資料も少ない。日常生活では使うことのない「外国語」として英語を教育する中で、機器等に関して英語教育環境が日本ほど恵まれていない中国で、どのようにし優れた英語教員を養成しているのかについての研究は皆無であった。そこで、我々の従来の研究の延長線上にある本研究を遂行し、日本の英語教員養成に是非貢献したいと考えた。

3. 研究の方法

1年目は、第2言語習得論を専門とする田浦を中心に、前回の調査方法を改善し、9月より現地での調査（TOEFL、面接聞き取り調査、教室内でのエスノグラフィカル・スタディー）を計画し、上海師範大学の教員（研究協力員）との連絡は、中国の大学英语教育に6年間携わった経験のある陸が、並行して行い、教員面接、学部長との会談等を開始した。国内外の研究者との調整も陸がe-mailを使い、全員の共通認識を保つよう指示した。両研究者は9月に、上海師範大学の外国語学院の英語師範と英語専攻の学生を中心に、本研究に沿った縦断研究データ（TOEFL）の収集を行った。

2年目の9月にも、1年間の授業で英語力がどれほど向上したかを計測し、2回生に年度当初の9月に一年生と同様のデータ収集を縦断的に行った。

3年目は、学生の教育実習が始めたので、9月の現地調査に縦断データを取りながら、教育実習についての調査も加えた。学生の実習先の中、高校での授業を見学し、その後学生と指導教員との懇談も行った。

更に、4年目は、大学教員を目指す学生と卒業後中高校で英語教員を目指す学生の比較もできるよう取り組んだ。最終年度の縦断調査のデータを含む、全体の調査結果をまとめ、研究報告書として提出した。

各年度に収集されたデータは、田浦の監督のもと量的分析を、研究協力者の董と小野が統計分析に当たり、質的分析については研究員5名全員で当たった。4年間の研究で、中国に於ける小・中・高教員を目指す学生の入学以降に受ける講義の現状と、それに伴う学生の英語力・指導力・教育に対する姿勢・教育実習の現場について精査し、まとめ上げることを目標とした。既に3年間の現地調査で人脈はもとより、より妥当性・信頼性の持てる研究を確実に遂行し、目的は4年後に達せ

られると確信を持っていた。更に、現在の日本での英語教員養成に対する提言までできればと期待して取り組んだ。

4. 研究成果

最初の3年間は、第2言語習得論を専門とする田浦を中心に前回の科研費研究（課題番号17520404）の調査方法を改善し、陸は中国の大学での教育経験と人脈を活用し、毎年9月に一週間ほど、上海師範大学・外国語学院の英語学科にて、現地の調査 TOEFL、面接聞き取り、教室内でのエスノグラフィカル・スタディ、学生の小・中・高校での実習、懇談（教員にインタビュー）、学部長との会談等を3回行った。

2年目までの成果は研究論文として次のように発表した。“An English teacher training course at a Teachers’ College in China”、共著、平成23年10月、立命館大学大学院言語教育情報研究科・Studies in Language Science Working Paper 第1号（pp.5-10）

3年目の9月に、上海師範大学の師範専攻の3・4回生を中心に、教育実習の学生の様子も見学・追跡し、小・中・高校英語教員を目指す学生の実習の様子も調査した。当初、大学の学部長らがやや難色を示したのは、学生の実習先が師範大学の連携校ではないのが理由であり、見学は無理かもしれないと言われた。その後、実習の指導教員の理解と協力により、すべての見学が実現し、上海地区の英語教員養成、小・中・高の各レベルの授業や学生レベルを系統的にデータ収集も出来た。これは日本の英語教員養成、特に小学校の英語教育にとっては良い参考資料になることは間違いないと確信している。この点は、当初の計画以上に進展していた大きなポイントになった。

教育実習の調査は以下のようでした：

上海第四中学校にて、師範専攻3回生(女)による 中 14 班クラスの英語の授業を見学

した。使用教科書は Oxford English, Shanghai Edition (OESE) で、Unit4“Jobs People Do”のテーマを中心に授業を展開した。45分の間、実習生の英語はとても綺麗で、優しく学生とのコミュニケーションを取りながら、PPTにより画像と音声で上手に授業を進め、授業はすべて英語で行われ、学生達のレベルも高かった。

上海七宝高校にて、師範大学4回生朱さん(女)と采さん(男)二人の実習授業 高1の英語リーディング授業を見学した。教科書は同じシリーズのOESEで、英語辞書の使い方と単語や文法の確認を中心に40分の授業だった。授業はすべて流暢な英語で行われ、PPTの画面と音声を使いながら、学生中心のやり方で教科書の内容が進められ、とても効果的で充実した授業でした。

上海闸北区第一中心小学にて、小学2年生の英語授業を見学した。教歴11年のベテラン若手教員・戴佑欣(女)による35分の授業で、30人の子ども達と楽しい授業を見させてくれた。授業は全て英語で、PPTを見ながら発音や会話を練習し、子ども達はとても積極的に先生の指導に従い、上手に練習やゲームに参加し、疲れた姿は見られなかった。授業後は実習生、指導教員と共に授業評価をし、各レベルの英語教育について意見交換をした。

3年目の成果を研究論文として公表した。：「中国・上海地区における小・中・高校での英語教育調査報告書」、共著、平成24年11月、立命館大学大学院言語教育情報研究科・Studies in Language Science Working Paper 第2号（pp.1-18）

最終年度の4年目は、中国の大学生の6月卒業時期と合わせ、年末の12月に上海師範大学への継続現地調査を行った。中国の大学生が、4年間の学習で英語力がどれほど向上したかについて引き続きデータ収集を縦断的に行い、

卒業前までの学力を報告書にまとめた。

4年間のTOEFL模試の測定と結果については、以下のである。

2010年9月に上海師範大学に入学した学生の中で、将来英語教師を目指す師範英語4クラスの97名と英語専攻4クラス81名の合計178名に、10月TOEFLを受験してもらい入学時の英語力とした。入学当初1年間の英語力の伸びを見るために、2回生進級直後の10月に師範英語4クラス112名と英語専攻4クラス82名の合計194名にTOEFLを再度受験してもらった。4回生の後半は卒業論文作成時期であり大学には出てこないで、12月に上海師範大学での英語教育の成果を見る意味で3度目のTOEFL受験を依頼した。但し教育実習や卒業論文作成に忙しく実際に受験したのは、師範英語4クラス45名と英語専攻4クラスの37名の合計72名に留まった。

大学1・2・4回生時の3回ともTOEFLを受験した学生は68名だけであったので、この学生達を対象に入学当初の1年間の英語力の伸びと4年間の伸びを計測した結果を以下に報告する。リスニングに関して、入学後1年間リスニング力は有意な伸びを示すが、4回生時には低下を示した。但し、1回生時を統計的に上回るスコアで卒業を迎えることがわかった ($F(2,66) = 49.186, p < .001, \text{Eta squared} = .598$)。文法・語彙力を見ると、2回生時に大幅に得点が向上し、4回生時もその得点を保持できていた ($F(2,66) = 23.528, p < .001, \text{Eta squared} = 47.056$)。読解力は特異な傾向を示し、2回生時に1回生時よりも低下が見られ、4回生には1・2回生時に比べて大幅な向上が示されていた ($F(2,66) = .624, p < .001, \text{Eta squared} = 19.871$)。最後にTOEFL総合点は、2回生時に大きな向上があり、4回生時も向上が保持されていた。つまり4年間の成果として509点が532点に23点英語力が向上した。

入学当初1年間でリスニング・文法・語彙力は大きく伸びたが、卒業まで保持できていた

のは文法・語彙力だけで、リスニングは入学時を上回ったが2回生時より低下した。読解力は入学後低下を示したが最終的に4回生時には大きな向上が見られた。これより当初1年間はオールスキルに偏重した学習をしたが、その後は偏りのない学習を継続したおかげで、4年後、英語力総合力としてのTOEFLスコア向上に繋がったと解釈できる。

4年間の研究で、中国に於ける小・中・高の教員を目指す学生の入学以降に受ける教育の実態を精査しまとめて上げることが出来た。今後、現在の日本での英語教員養成に対する提言ができるよう更に取り組んでいく。

加えてに、次回の科研費を申請し、中国の小学校英語教育の成功例を中心に、調査とデータ収集をし、報告書をまとめ日本の小学校英語教育発展に提言と貢献をしていくことと考えている。日本の英語教育・更に小学校英語教員の養成や子ども達の英語力を高める為に、研究を進めて行く予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

陸 君、石丸千重乃、日本と中国における小学校英語教育の現状と課題、京都文教大学人間学研究所 人間学研究、査読有、vol.14、2013、pp.1-22

田浦 秀幸、陸 君、中国・上海地区における小・中・高校での英語教育調査報告書、立命館大学大学院言語教育情報研究科・Studies in Language Science Working Paper、査読有、第2号、2012、pp.1-18

TAURA Hideyuki, LU Jun, "An English teacher training course at a Teachers' College in China", 立命館大学大学院言語教育情報研究科・Studies in Language Science Working Paper、査読有、第1号、2011、pp.5-10

〔学会発表〕(計1件)

陸君 他3人

多様化する学生と大学英語教育(ポスタ
ー発表) 大学英語教育学会第52回国際
大会、2013年8月31日、京都大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

陸君 (LU, Jun)

京都文教大学・臨床心理学部・教授

研究者番号：40351374

(2) 研究分担者

田浦 秀幸 (TAURA, Hideyuki)

立命館大学・言語教育情報研究科・教授

研究者番号：40313738

(3) 連携研究者

()

研究者番号：